

ロバート・キャパ／ゲルダ・タロー 二人の写真家 —写真のちから—

3月末、自宅のすぐ近くの横浜美術館で、写真展をやっていました。その存在に気がついたのが遅く、最終日の前日でした。仕方がないので、最終日の早めに行きました。ちょうどよい込み具合でした。

壁の目の高さに、昔のサイズの写真が貼られていました。いつものように 500 円を出して、音声ガイドを借りました。

Part 1 がゲルダ・タロー (Gerda Taro) で、83 枚の写真がありました。ゲルダ・タローは、1936 年、キャパと一緒にスペイン内戦を取材しました。ゲルダとキャパは同一行動をとっていたので、どちらが撮った写真か判別が難しいのだそうですが、最近の研究で判明した 83 枚を見ました。

右の写真がゲルダ・タローです。1910 年ドイツ生まれのユダヤ系ポーランド人です。聡明そうで、美しい人です。

ゲルダの写真で驚いたのは、ゲルダがひとりで取材に行って撮った写真類です。兵士の死体置き場、市民の死体置き場を取材し、遺体を写しています。ナチスに対する憎しみなのでしょうか、鬼気迫るものを感じました。

1937 年、ゲルダは、取材中に戦死してしまいます。26 歳の若さでした。

Part 2 がロバート・キャパ (Robert CAPA) でした。1932 年から 1954 年までの写真を見ることができました。

キャパを有名にした写真が右の 2 枚です。

1936 年・スペイン内戦の「崩れ落ちる兵士」と 1944 年、史上最大の作戦といわれている「ノルマンディ上陸」の際の兵士を撮影したものです。



崩れ落ちる兵士 (1936 年)



第二次世界大戦 (1944 年)

どれもリアリティに富んでいます。

この 2 枚のほかにも、第二次世界大戦で、ドイツの敗戦がほぼ決まったころ、フランス国内でドイツに加担した女性が市中に晒される姿や、日中戦争の難民の姿など、印象深い写真が多く並んでいました。

最も印象に残ったのが、右の写真です。1954 年、ベトナムで撮影されたものです。

右の道路上には、フランス軍のトラックと 2 台の軍用オートバイがあり、土煙を上げて走っています。その道端に傘をさしている一人の現地老人。そのコントラストが胸を打ちました。キャパの人間愛を感じました。

キャパは、この写真を撮ったあと、他の戦場に移動し、地雷を踏んで亡くなりました。

ゲルダの写真、キャパの写真。「写真のもつ力」を強く感じることができました。

(M.S.)



インドシナ戦争 (1954 年)